

太宰治「トカトントン」論：精神と肉体の観点から

河内，重雄
北九州市立大学文学部：准教授

<https://doi.org/10.15017/7325727>

出版情報：語文研究. 135, pp.36-48, 2023-06-02. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：



太宰治「トカトントン」論

——精神と肉体の観点から——

河 内 重 雄

一 本稿の狙い

太宰治「トカトントン」(『群像』昭和二十二年一月)は、二十六歳の「私」の手紙と、その手紙に対する「某作家」の返答の手紙からなる小説である。作品梗概は以下の通り。

青森市寺町生まれの「私」は中学を卒業後横浜の軍需工場に三年勤め、その後軍隊で四年間暮らし、敗戦後は青森市から二里の部落の三等郵便局に勤めることとなる。戦後、「私」は一つの音に悩み続けているという。昭和二十年八月十五日正午、玉音放送を聞き、中尉の「われわれ軍人は、あく迄も抗戦をつづけ、最後には皆ひとり残らず自決して、以て大君におわびを申し上げる。」という言葉聞いて、死のうと思っ

たその時、誰かが金槌で釘を打つトカトントンという音がすかに聞こえてきて、何とも馬鹿馬鹿しい気持ちになってしまふ。その音は「私」からミリタリズムの幻影をはぎとってくれた訳だが、以降、現在に至るまでその小さな音は続いている。

郵便局に勤めるようになって間もない頃、「私」は軍隊生活の追憶を小説に書くかと思う。いよいよ最後の章を書くことになり、オネーギンのような結び方にしようか、ゴーゴリのような終局にしようか迷い、銭湯の裸電球を見上げた時、トカトントンと聞こえる。途端に浪がさつと引き、「私」はお湯をかき回している一個の裸形の男に過ぎなくなり、小説を書くことが馬鹿馬鹿しくなってしまう。しばらくは「精神的」でない生活をしていたが、尾形光琳の画などを見て精神生活

が息を吹き返し、郵便局の日々の業務に精励するようになる。忙しかった円貨の切り換えも今日で終わりという日に、ひどく得意な満足の気持ちで「労働は神聖なり」という言葉を思い出し、ほっと溜息をついた時にトカトントンと聞こえたような気がして、何もかも一瞬のうちに馬鹿らしくなってしまう。

そのうち「私」は恋をするようになる。相手は旅館の女中の時田花江といい、身持ちがよろしくないという噂で、週に一度くらい二、三百円貯金しに郵便局にやって来る女性である。「死んでも、ひとのおもちやになるな!」という鏡花の小説の台詞を言ってみようかと思いつつ対応していると、五月の半ば頃、五時頃に会いたいと言われ、花江と言われて二人で海へ行き、貯金に関する花江の言い訳を聞いて、「花江さんとなら、どんな苦勞をしてもいい」と思った時、トカトントンという音が近くの小屋から聞こえてきて、「ばかばかしい。腹が減った。」と「私」は思う。

六月、「私」は青森で偶然労働者のデモを見る。これまで社会運動や政治運動に興味のなかった「私」だが、その楽しそうな行進を見て伸びていく活力を感じ、「人間はまづ政治思想、社会思想をこそ第一に学ぶべきだ」と思う。人々の持つ真紅の旗が燃えている有様を「死んでも忘れまい」と思った

ところ、トカトントンとかすかに聞こえ、それっきりになってしまう。八月の駅伝競走では選手たちの走りに「無報酬の行為」を見て「虚無の情熱」だと思い、局員たちを相手に「私」はキャッチボールを始める。へとへとになるまで続けると脱皮に似た爽やかさが感じられ、これだと思つた途端にトカトントンが聞こえ、虚無の情熱さえ打ち倒されてしまう。この頃ではトカトントンがいよいよ頻繁に聞こえ、身動きができなくなっているため、この音から逃れるにはどうすればいいか教えて欲しいという。

この手紙を受け取った「某作家」は次のような返答を与える。真の思想は叡智よりも勇氣を必要とするものだ、「身を殺して靈魂をこらし得ぬ者どもを懼るな、身と靈魂とをゲヘナにて滅し得る者をおそれよ」というイエスの言に霹靂を感じることができたら君の幻聴は止むはずだ、と。「トカトントン」(以下、本作とする)の作品梗概は以上である。

タイトルでもあるトカトントンという音にはどのような意味があるのか。本作を解釈する上でこのことは問われてしかるべきであろう。トカトントンという音について、亀山恭代氏は次のように指摘している。^(注2)

「トカトントンの音は熱中するから聞こえてくる」と三

好行雄は言う。なるほどこの音は、青年の情熱にことごとく水を差す。しかしながら、より厳密にそれが響く瞬間を見定めるならば、情熱や高揚といった身振りとは別の共通点が直ちに見出されよう。小説執筆にせよ、仕事にせよ、恋にせよ、行為がただ行為に留まる限りでは「トカトントン」の音は鳴らない。青年が「トカトントン」の音を聞くのは、行為が向かう目標を定め、意味付けた時なのだ。

ただ小説を書いてみるのではなく作家になることを意識した時、ただ窓口業務に奔走するのではなくそこに「神聖」な価値をおいた時、ただ恋心を抱くのではなくそのために苦勞して生きようと決意した時、「真の自由」を支えるような「政治思想、社会思想」を理想に掲げた時、「トカトントン」の音は鳴る。無償の行為を「これだ」と思うのも、ある種の虚無主義という行動指針となる。その音は、青年が生きるよすがとして行為を意味付けた瞬間に鳴り響く。

トカトントンという音は意味付けるという精神的行為を破壊する、とまとめられようか。首肯できる指摘と言えよう。この指摘に付け加えて言えば、トカトントンという音には肉

体といった要素も認められるように思われる。初めてトカトントンの音を聞いた時について、「私」は次のように語っている。

ああ、その時です。背後の兵舎のはうから、誰やら金槌で釘を打つ音が、幽かに、トカトントンと聞えました。それを聞いたとたんに、眼から鱗^{うろこ}が落ちるとはあんな時の感じを言ふのでせうか、悲壮も厳肅も一瞬のうちに消え、私は憑^つきものから離れたやうに、きよろりとなり、なんともどうにも白々しい気持で、夏の真昼の砂原を眺め見渡し、私には如何なる感慨も、何も一つも有りませんでした。（略）

あの、遠くから聞えて来た幽かな、金槌の音が、不思議なくらゐ綺麗に私からミリタリズムの幻影を剥ぎとつてくれて、もう再び、あの悲壮らしい厳肅らしい悪夢に酔はされるなんて事は絶対に無くなつたやうですが、しかしその小さい音は、私の脳髓の金的^{きんてき}を射貫いてしまつたものか、それ以後げんざいまで続いて、私は実に異様な、いまはしい癲癇持ちみたいな男になりました。

行為などに一定の意味を与えるミリタリズム（軍国主義）を

トカトントンという音は破壊した訳だが、その音は「背後の兵舎のはうから」聞こえてきたという。トカトントンという音については、「トカ」というのは釘を軽く木材等に打ち付けた時の音で、「トントン」というのはしかる後に強く釘を打ち付けている音と考えられる。金槌を使い慣れていることが分かる音であり、兵舎という建築物を修理するなどしているとすれば、トカトントンというのは、プロの大工などが金槌で釘を打つ音と解せられよう。鍛えられた肉体から発せられる音、引き締まった肉体をイメージさせる肯定的な音——いわば肉体を価値化する音——と言えようか。本稿では以下、本作を精神と肉体というテーマに即して解釈してみたい。

二 精神から肉体への移行

何らかの意味を与えるという精神的行為を打ち壊すトカトントンという音。玉音放送と共に初めて聞えたその音には肉体の要素が認められると述べた。トカトントンという音をこのように解した上で、以降の小説の流れを確認してみたい。

二度目にトカトントンの音を「私」が聞くのは、郵便局に勤めるようになって間がない頃、小説を書くこととした時である。以下はその部分の引用。

さいしよ、私は、この郵便局に来て、さあこれからは、何でも自由に好きな勉強ができるのだ、まづ一つ小説でも書いて、さうしてあなたのところへ送つて読んでいただかうと思ひ、郵便局の仕事のひまひまに、軍隊生活の追憶を書いてみたのですが、大いに努力して百枚ちかく書きすすめて、いよいよ明日のうちに完成だといふ秋の夕暮、局の仕事もすんで、銭湯へ行き、お湯にあたり、オネーギンの終章のやうな、あんなふうの華やかな悲しみの結び方にしようか、それともゴーゴリの「喧嘩噺」式の絶望の終局にしようか、などひどい興奮でわくわくしながら、銭湯の高い天井からぶらさがつてゐる裸電球の光を見上げた時、トカトントン、と遠くからあの金槌の音が聞えたのです。とたんに、さつと浪がひいて、私はただ薄暗い湯槽の隅で、じやぼじやお湯を掻きまはして動いてゐる一個の裸形の男に過ぎなくなりました。

(略)伯父のところに、わづかながら蔵書がありますので、時たま明治大正の傑作小説集など借りて読み、感心したり、感心しなかつたり、甚だふまじめな態度で吹雪の夜は早寝といふ事になり、まつたく「精神的」でない生活をして、そのうちに、世界美術全集などを見て、以前あ

んなに好きだつたフランスの印象派の画には、さほど感心せず、このたびは日本の元禄時代の尾形光琳と尾形乾山と二人の仕事に一ばん眼をみはりました。光琳の躑躅などは、セザンヌ、モネー、ゴーギャン、誰の画よりも、すぐれてゐると思はれました。かうしてまた、だんだん私の所謂精神生活が、息を吹きかへして来たやうで、(略)

「かうしてまた、だんだん私の所謂精神生活が、息を吹きかへして来た」などとおることから、小説を書くことは精神的な行為と考えられる。その精神生活を、肉体の象徴としてのトカトントンが破壊したと言えよう。ここで注目すべきは、「じゃぼじゃぼお湯を掻きまはして動いてゐる一個の裸形の男に過ぎなくな」ったという部分だ。トカトントンによって精神的要素が破壊された後、「私」は「一個の裸形の男」という肉体的な存在になっていると考えられるのではあるまいか。だとすれば、肉体を象徴するトカトントンによる破壊により、「私」は精神的存在から肉体的存在へと移行していると、解することができる。

三度目のトカトントンは、円貨切り換えの騒ぎの時に聞こえる。以下のようなうた。

(略) 平凡な日々の業務に精励するといふ事こそ最も高尚な精神生活かも知れない。などと少しづつ自分の日々の暮しにプライドを持ちはじめ、その頃ちやうど円貨の切り換えがあり、こんな片田舎の三等郵便局でも、いや、小さい郵便局ほど人手不足でかへつて、てんでこ舞ひのいそがしさだつたやうで、あの頃は私たちは毎日早朝から預金の申告受附けだの、旧円の証紙張りだの、へとへとになつても休む事が出来ず、殊にも私は、伯父の居候の身分ですから御恩返しはこの時とばかりに、両手がまるで鉄の手袋でもはめてゐるやうに重くて、少しも自分の手の感じがしなくなつたほどに働きました。

そんなに働いて、死んだやうに眠つて、さうして翌朝は枕元の眼ざまし時計の鳴ると同時にはね起き、すぐ局へ出て大掃除をはじめます。(略) いよいよ切り換えの騒ぎも、けふでおしまひといふ日に、私はやはり薄暗いうちから起きて局の掃除を大車輪でやつて、全部きちんとすましてから私の受持の窓口のところに腰かけて、ちやうど朝日が私の顔にまつすぐにさして来て、私は寝不足の眼を細くして、それでも何だかひどく得意な満足の気持で、労働は神聖なり、といふ言葉などを思ひ出し、ほつと溜息をついた時に、トカトントンとあの音が遠く

から幽かに聞えたやうな気がして、もうそれつきり、何もかも一瞬のうちに馬鹿らしくなり、私は立つて自分の部屋に行き、蒲団をかぶつて寝てしまひました。

「労働は神聖なり」と自らの行為を意味付ける精神生活がトカトントンによつて打ち壊されている。打ち壊された後、「蒲団をかぶつて寝てしまひました。」とあるのを肉体的な行為と解することができるとすれば、ここにもトカトントンによる精神から肉体への移行が見られると言えよう。

四度目のトカトントンの音は「私」が花江と海で話している時に聞こえる。以下は本作からの引用である。

橋のたもとに、花江さんが立つてゐました。スカートが短かすぎるやうに思はれました。長いはだかの脚をちらと見て、私は眼を伏せました。

「海のはうへ行きませう」(略)

「へんに、思つてゐます。」

「さう思ふのが当然ね」と言つて花江さんは、うつむき、はだかの脚に砂を掬つて振りかけながら、「あれはね、あたしのお金ぢやないのよ。あたしのお金だつたら、貯金なんかしやしないわ。いちいち貯金なんて、めんどうく

さい。」

成る程と思ひ、私は黙つてうなづきました。

「さうでせう？ あに通帳はね、おかみさんのものなのよ。でも、それは絶対に秘密よ。(略) おかみさんが、なぜそんな事をするのか、あたしには、ほんやりわかつてゐるんだけど、でも、それはとても複雑してゐる事なんですから、言ひたくないわ。つらいのよ、あたしは。信じて下さる？」

すこし笑つて花江さんの眼が妙に光つて来たと思つたら、それは涙でした。

私は花江さんにキスしてやりたくて、仕様がありませんでした。花江さんとなら、どんな苦勞をしてもいいと思ひました。(略)

その時、實際ちかくの小屋から、トカトントンといふ釘打つ音が聞えたのです。この時の音は、私の幻聴ではなかつたのです。海岸の佐々木さんの納屋で、事実、音高く釘を打ちはじめたのです。トカトントン、トントントカトン、とさかに打ちます。私は、身ぶるひして立ち上りました。

「わかりました。誰にも言ひません。」花江さんのすぐうしろに、かなり多量の犬の糞があるのをそのとき見つけ

て、よつぽどそれを花江さんに注意してやらうかと思ひました。(略)

空々漠々たるものでした。貯金がどうだつて、俺の知つた事か。もともと他人なんだ。ひとのおもちやになつたつて、どうなつたつて、ちつともそれは俺に関係した事ぢやない。ばかばかしい。腹がへつた。

「長いばかりの脚をちらと見て、私は眼を伏せました。」などの語りからも分かるように、「私」の恋は精神的なもの(テラトニック・ラヴ)と考えられる。トカトントンはその精神的恋愛を打ち壊したと言えよう。トカトントンにより精神的要素が破壊された後、「私」は「ばかばかしい。腹がへつた。」と思つている。腹が減つたというのは、肉体的側面への移行と解してよいのではなからうか。ついでに言えば、「花江さんのすぐうしろに、かなり多量の犬の糞があるのをそのとき見つけ」たという語りも、排泄と捉えれば、「腹がへつた」と関連することと考えてよいかもしれない。

以上、肉体を象徴するトカトントンにより、精神から肉体への移行が認められることを確認した。一応述べておくと、五度目以降のトカトントンの音については、肉体への移行を示す語りは特に見られない。五度目は社会主義運動(「真紅の

旗」)の行進を見た時に、六度目は駅伝競走を見た時に聞かえているが、肉体への移行を思わせる記述は見当たらない。しかしながら、五度目以降については、語らずとも分かるから書かれていないと考えてよいのではあるまいか。そもそもトカトントンという音が肉体をイメージさせる上に、これまで何度も肉体への移行が語られているからだ。精神から肉体への移行は本作全体に見られるとしたい。

小説ラストの「某作家」からの返答についても、同様に肉体への移行がなされると考えてよいであろう。太宰と思しき作家の「僕」は、「真の思想」は、叡智よりも勇気が必要とするもの」だと言い、マタイ十章の二十八のイエスの言葉に霹靂を感じることができたならトカトントンは聞こえなくなるはずだと述べている。しかし、この「某作家」の言っていることは思想＝精神的行為である以上、「私」がそれを「なるほど」と思った途端トカトントンが聞こえ、肉体的存在と化すと想像される。「某作家」を太宰と考えれば、作者は小説の最後の最後で顔を出し、トカトントンで否定される道化を演じていると言えようか。精神から肉体への移行を確認したところで、次の三では、本作が発表された当時において、肉体への移行がどのような意味をもっていたかについて述べてみたい。

三 戦前の精神主義の否定

肉体を象徴するトカトントンにより精神性が破壊され肉体へ。このような移行がいくつも見られることを本稿の二で確認した。この流れの意味するところについて先に結論を述べれば、この移行は戦前・戦中の精神主義の否定を意味していると考ええる。

戦前・戦中に精神がキークワードであったことについては、あるいは言うまでもないことかもしれない。太平洋戦争につながる日中戦争を契機として、国民全体を戦争に協力させようとは始められた国民精神総動員運動。官民一体となって進められたこの運動は、「欲しがりません勝つまでは」、「進め一億火の玉だ」、「ぜいたくは敵だ」など数多くの標語を生み出し、広く共有されていた。ガダルカナル島撤退など太平洋戦争で敗退が続き、結成された神風特別攻撃隊について、『朝日クロニクル20世紀 第四卷』^(注3)は次のように記している。

国力13／20倍の主敵アメリカとの戦いに敗れた日本は、大西中将が「統率の外道」と呼ぶ「念力」を戦力として、精神主義の倒錯的極致・特攻をもって最後の戦いを

挑んだ。

十死零生の特攻には、さまざまな死があった。出撃前夜、電灯もなく廃油を灯した缶詰の空き缶のみが明かりの薄暗い部屋に、飛行服のまま車座になっている10人ばかりの特攻隊員。ガラガラと異様に輝く眼の光には鬼気迫るものがある。目をつむるのが恐ろしい。彼らは、そう思っていた。

だが翌朝、彼らは悠揚迫らぬ面持ちで嬉々として死に向かつて出撃していった。彼らの夜の顔も昼の顔も、どちらもが本当の顔であった。

隊長の精神訓話のたびに酒を飲んで暴れだす特攻隊員がいた。「何が楠公精神だ。親はおれを殺すために大学を出したんじゃない」。だが、この青年も出撃のとき、思い残すこともないかのように肩をゆすりながら基地を飛び立ち、敵輸送船団に向かったまま帰還しなかった。

軍隊と精神性については、隊長による精神訓話以外にも、精神注入棒といった体罰道具が使われていたことなども挙げられようか。軍隊で四年間を暮らした本作の「私」にも、これらは経験のあることと思われる。繰り返すが、戦前・戦中には精神が価値化されていたと言えよう。

戦前・戦中の精神主義に対し、戦後は肉体が価値化されたと考えられる。以下は雑誌『アベック』（昭和二十三年七月）の「編集室より」からの引用である。

おびただしい雑誌の氾濫の中に、また一つの本誌が創刊されたことについては、勿論いくぶんの抱負がないわけではない。「明るく・楽しく・面白く」さうして「大衆と共にありたい」と云ふのが念願だが、さて出来上つたものが皆様のお気に召したかどうか。倉惶の間、企画の半分も実現できなかったのは残念だが、次号からはその全幅を実現させてアツと云はせるつもりで目下着々と進捗中どんな珍企画が出るか御期待をお願いしておく。

本誌の特色の一つはグラフだがまづ「脚」を取上げた。洋装の女性がふえるにつれて脚の氾濫が眼につくが、肉体を軽視してきた在来の人々に、肉体をもつと美しくと云ふ意味合ひから、西田美校教授その他に依嘱して本文にも、「脚線美」の特集を試みた。単なる座興ではないのである。

ちなみに、目次に目をやると、谷崎潤一郎の「富美子の足」『雄弁』大正八年六月・七月」という作品名も「名作紹介」として

見られる。「編集室より」には「肉体を軽視してきた」とあるが、戦前・戦中においては肉体は抑圧されてきたと言う方が正確ではなからうか。戦後に創刊された「おびただしい雑誌」の中で、肉体を中心テーマとしたのはむしろ『アベック』だけではない。例えば昭和二十一年九月に創刊された雑誌『赤と黒』の創刊号は「肉体芸術特輯」で、林猷「肉体の譜」、永田一修「脚の美学」、古泉奔「乳房と人生」、高橋鉄「肉体の原始林」といった作品が掲載されている。戦前・戦中と精神の陰に隠れていた肉体が、戦後は精神にとって代わって中心的な位置を占めるようになったと言えようか。山岡明『カストリ雑誌にみる戦後史』^(注4)は戦後のいわゆるカストリ雑誌について、次のように述べている。

戦争がおわって、姦通罪がなくなったためか、人妻の情事を主題とした小説や読物が氾濫したものだ。た。《肉ニク体小説》とか《愛欲小説》《情痴小説》などと呼ばれたが、つまりは世相の影が刻みこまれている《風俗小説》で、表現の自由、人間性の解放という歴史の流れのなかで、《カストリ雑誌》には、こうした無名作家によるこの種の小説や読物が多かった。（略）

なお、いわゆる《肉ニク体小説》は、無名作家ばかりでな

く、名の知られた作家の手になるものも多かったのは、いうまでもない。次の人たちが、こうした小説や読物などの作者として〈カストリ雑誌〉でよく見かけた名前である。

田中英光。田村泰次郎。井上友一郎。柴田錬三郎。有馬頼義。寒川光太郎。北条誠。池田みち子。丸木砂土。式場隆三郎。武野藤介。北里俊夫。野一色幹夫。竹村文祥。矢野目源一。南部僑一郎。東郷青児。高橋鉄。吉田謙吉。斎藤昌三。織田作之助の名がそれほどみられないのは、〈カストリ雑誌〉が氾濫した時代には、すでに亡くなっていたからである。〔世相の影の濃い〈肉体小説〉〕

有名・無名の作家たちによって無数の「肉体小説」が戦後に書かれたことがうかがえようか。ちなみに、同時代の「肉体小説」という言葉の用例については、宮本百合子『入門文学講座 第三卷』（昭和二十五年三月 新日本文学会）の「文学と生活」に次のような一節が見られる。^{（注5）}

しかし、この頃よくあるように、家庭のある男の人と恋愛めいたいきさつがはじまったようなとき、あるいは、そういういきさつが自分の人生に起りかかっているのを

自覚したとき、そのひとは、現実の人生問題をゆたかな文学的教養とむすびあわせて、どのように身を処していくだろうか。トルストイの小説の中には、トルストイがロシアの上流社会の習慣に抱いていた批判から「アンナ・カレーニナ」がかかれ、「クロイツェル・ソナタ」が書かれている。彼女はこれらの作品の中に眼の前にさし迫っている自分の人生問題の解決のきつかけをつかむことはできない。それならばその頁の上に、まともに立っている男女の姿が見当らないほど、みだれにみだれて、その誇張が読者の好奇心をそそってゆくような肉体小説の氾濫の中に、人生に対するよりどころだの、自分の良心の拠点だけが見出されるというのだろうか。

「肉体小説」と書けばそれがどういった小説であるか、『入門文学講座』の読者には分かり切っていたものと推測されよう。「氾濫」とあるのは前掲の『カストリ雑誌にみる戦後史』の指摘と重なる。念のため付言しておく、カストリ雑誌以外の雑誌等にも肉体をテーマとした小説はいくつも書かれている。例えば私たちは同じく無頼派の作家とされる坂口安吾の「白痴」（『新潮』昭和二十一年六月）などを、肉体を重要なテーマとする小説として挙げることができるであろう。

戦前・戦中の精神主義から戦後は肉体重視へ。いささか乱暴であることは承知の上でこのようにまとめれば、本作における精神から肉体への移行は、戦前・戦中の精神主義の否定を意味すると解せられる。本作は、戦前・戦中から戦後にかけて、精神主義から肉体の重視へと価値観が変化したことを象徴的に描いた小説と言えるのではあるまいか。

四 精神化した肉体の矛盾について

太宰作品では、語り手が今書いている（語っている）文章に触れるといったことが珍しくない。例えば、「道化の華」（『日本浪曼派』昭和十年五月）には次ような一節がある。

僕はもう何も言ふまい。言へば言ふほど、僕はなんにも言つてゐない。ほんたうに大切なことがらには、僕はまだちつとも觸れてゐないやうな氣がする。それは当り前であらう。たくさんのことを言ひ落してゐる。それも当り前であらう。作家にはその作品の価値がわからぬといふのが小説道の常識である。僕は、くやしいがそれを認めなければいけない。自分で自分の作品の効果を期待した僕は馬鹿であつた。ことにその効果を口に出してな

ど言ふべきでなかつた。口に出して言つたとたんに、また別のまるつきり違つた効果が生れる。その効果を凡そかうであらうと推察したとたんに、また新しい効果が飛び出す。僕は永遠にそれを追及してばかりゐなければならぬ愚を演ずる。

「道化の華」では、作者と思しき語り手が、今書いている文章に読者がどのように反応するかということに触れている。通常、語り手が、今語っている文章の意図について述べるのはタブーではあるまいか。語りの意図を読者に語ってしまうと、読者がその通りに反応してくれなくなる恐れがあるからだ。故に、作者、あるいは語り手は、読者に自らの意図を悟られぬよう、自分の意図通りに読者の反応を導こうと小説の展開等を工夫すると思われる。「道化の華」では、語り手が文章の意図を語ることで、読者はどのように反応すればよいかわからなくなってしまうのではなからうか。語り手だけでなく読者も新しく飛び出す「効果」を「追及し」続けねばならないからである。「道化の華」はその自己言及的な語りにより、読者の解釈の確定を無限に遅らせていると言えよう。

もう一つ語り手が自身の語りに触れている小説を挙げたい。「女生徒」（『文学界』昭和十四年四月）はタイトル通り女生徒を語

り手とする一人称の小説である。語り手は自身の語りについて次のように述べている。

ゼスチュアといへば、私だつて、負けないで沢山に持つてゐる。私のは、その上、ずるくて利巧に立ちまはる。本当にキザなのだから始末に困る。「自分は、ポオズをつくりすぎて、ポオズに引きずられてゐる嘘つきの化けものだ。」なんて言つて、これがまた、一つのポオズなのだから、動きがとれない。

「私は嘘つきだ」というこの発言自体がまた一つのポーズ＝嘘であるという。エビメニデスのパラドックス「全てのクレタ島人は嘘つきである」と、一人のクレタ島人が言つた。」がパラドックスであるのは、自分で自分が嘘をついているとするその自己言及の形にある。「女生徒」の語り手の語りの真偽が決定不可能であるのは自己言及的な語り故と言える。「女生徒」にはニーチェの思想やキリスト教、近衛文麿の国家総動員体制といった政策などが「雑居」（丸山真男『日本の思想』（昭和三十六年十一月 岩波書店）の「I 日本の思想」）している。例えば語り手は近衛文麿の写真をけなしているようだが、その真偽については決定できないなど、雑居している思想や政策等

について語り手が肯定していいようが否定していいようがその真偽は最終的には決定不可能である。「道化の華」同様自己言及的な語りにより、読者は解釈を一つに固定することができないようになっていと言えようか。

本作にも語り手「私」が自身の今書いている文章について意見を述べている箇所がある。以下のようなものだ。

さうしてそれから、（私の文章には、ずるぶん、さうして、それからが多いでせう？ これもやはり頭の悪い男の文章の特色でせうかしら。自分でも大いに気になるのですが、でも、つい自然に出てしまふので、泣寝入りです）さうしてそれから、私は、コヒをはじめたのです。

無論、この自己言及は読者の解釈を最終的に確定させないといったことはなからう。が、本作にはこの箇所の自己言及とは別のレベルで、読者の最終的な決定を無限に後退させる自己言及の構造がある。

トカトントンは、意味を与えたりする精神的な営みを破壊し、肉体的存在へと語り手を変えてしまふ、肉体を象徴する音である。しかしながら、トカトントンは作中で何度も語られることで、精神性を否定する肉体主義とでも言うべき思想

のようなものと化している。同時代においても肉体は重要な文学的概念とされており、戦後という新しい時代に表現の自由や人間性の解放などの積極的な意味を与えていた。思想などの精神的営みを打ち壊す肉体の象徴としてのトカトントンとは、精神性を否定し肉体を価値化する精神としてのトカトントンを破壊し得るのか。肉体が重要な文学的概念となつていることを知っている本作の同時代読者がぶつかるとは、このような決定不可能な問いではあるまいか。言うまでもなく、語り手の「私」はこのような問いとぶつかつてはいない。ぶつからないからこそ、トカトントンは語り手の中で執拗に鳴り続けることになるのだと言えよう。

なお、本稿の二で触れたが、五度目、六度目のトカトントンが聞こえる箇所では、思想としての肉体ともとれる語りが見られる。五度目は行進であり、六度目はマラソンがそれである。思想としての肉体を、肉体を象徴するトカトントンが否定している訳だが、ここにも矛盾が認められよう。

肉体という思想『精神をいくら小説で書いてみたところで、戦前・戦中の精神主義を超えたことにはならない。せいぜい肉体という精神を一つ追加することにしかない。本作には同時代の文学の大きな流れに対しこのようなメッセージを投げかける文脈があると考ええる。

注

注1

以下、太宰作品の引用は『太宰治全集』（全十二巻 昭和四十六年三月～昭和四十七年二月 筑摩書房）による。なお、本稿における引用文中の傍線は全て筆者により、旧漢字は新漢字に改めた。

注2

「小説の躊躇い——太宰治「トカトントン」をめぐる」（『芸 国語国文学』平成二十六年三月）。

注3

平成十三年一月、朝日新聞社。

注4

昭和四十五年十二月、オリオン出版社。

注5

「文学と生活」の本文の引用は『宮本百合子全集 第十九巻』（平成十四年六月 新日本出版社）による。

（こうち しげお・北九州市立大学文学部准教授）